

受験番号	氏名
------	----

(答えは、すべて解答用紙に記入すること。)

□ 次の文章を読んで、あとの問一〜八に答えなさい。

自分自身の読書法を見出すためには先ず多く読まなければならぬ。ア多読はイ濫読と同じでないが、濫読は明かに多読の一つであり、そして多読は濫読から始まるのが普通である。古来読書の法について書いた人は殆どすべて濫読を戒めている。多くの本を濫りに読むことをしないで、一冊の本を繰り返して読むようにしなければならぬと教えている。それは、疑いもなく真理である。けれどもそれは、ちょうど老人が自分の過去のおやまちを振り返りながら後に来る者が再び同じおやまちをしないようにと青年に対して与える教訓に似ている。かような教訓には善い意志と正しい智慧とが含まれているであろう。しかしながら老人の教訓を忠実に守るに止まるような青年は、進歩的な、ドク①ソウ的なところの、乏しい青年である。昔から同じ教訓が絶えず繰り返されてきたにも拘らず、人類は絶えず同じ誤謬を繰り返しているのである。例えば、恋愛の危険については古来幾度となく論ざれている。けれども青年はつねにかように危険な恋愛に身を委ねることをやめないのであって、そのために身を滅す者も絶えないではないか。あやまちを為すことを恐れている者は何も憚むことができぬ。人生は冒険である。恥ずべきことは、誤謬を犯すということよりも A 自分の犯した誤謬から何物をも学び取ることができないということである。努力する限りひとはあやまつ。誤謬は人生にとって飛躍的な発展の契機ともなることができる。それ故に神もしくは自然は、老人の経験に基く多くの確かに有益な教訓が存するにも拘らず、青年が自分自身でつねに再び新たに始めるように 1 仕組んでいるのである。だからといって、もちろん、先に行く者の与える教訓が後に来る者にとって決して無意味であるというのではない。そこに人生の不思議と面白さがあるのである。読書における濫読も 2 同様の関係にある。濫読を戒めるのは大切なことである。しかしひとは濫読の危険を通じて自分の気質に ② テキした読書法に達することができる。一冊の本を精読せよと云われても、特に自分に必要な一冊が果して何であるかは、多く読んでみなくては分らないではないか。古典を読めと云われても、すでにその古典が東西古今に亘って数多く存在し、しかも新しいものを知っていなくては古典の新しい意味を発見することも不可能であろう。読書は先ず濫読から始まるのが普通である。しかしいつまでも濫読のうちに止まっていることは好くない。真の読書家は殆どみな濫読から始めている、しかし濫読から抜け出すことのできない者は真の読書家になることができぬ。濫読はそれから脱却するための濫読であることによって意味を有するのである。

濫読に止まるなどということは多読してはならぬということではない。多読家でないような読書家があるであろうか。むしろ読書家とは多読家の別名である。諺に、賢者は 3 ただ一冊の本の人間を恐れる、という。ひとは多く読まなければならぬ。読書の必要はただ一冊の本の人間にならないために、云い換えれば、一面的な人間にならないために、存在するのである。単に自分自身の時代のみでなく、また過ぎ去った時代について、単に、自分自身の国のみでなく、また世界について、全体の生活と思想について正しい見通しを得るために、多く読まなければならぬ。即ち読書において一般的教養を心掛けることが大切である。読書家とは一般的教養のために読書する人のことである。単に自分の専門に関してのみ読書する人は読書家とはいわれぬ。教養とは或る専門の知識を所有することをいうのではなく、却って、教養とはつねに一般的教養を意味している。専門家になるために読書の必要のあることは云うまでもないが、ひとは特に一般的教養のために読書しなければならぬ。そして専門家も一般的教養を有することによって自分の専門が学問の全体の世界において、また社会及び人生にとって、如何なる地位を占め、如何なる意義を有するかに就いて正しい認識を得ることができるのである。専門家も人間としての教養を具え専門家の一面性の弊に 4 陥らないように読書は 5 勧められるのである。そのうえ自分の専門以外の書物から専門家が自己の専門に有益な種々の 6 示唆を与えられる場合も少なくないであろう。かくして多読は濫読の意味においては避くべきことであるとしても 7 博読の意味においては必要であると云わねばならぬ。

然るに濫読と博読とが区別されるようになる一つの大切な基準は、その人が専門を有するか否かということである。何等の方向もなく何等の目的もない博読は濫読にほかならぬ。一般的な読書に際しても、ひとはなお何等か専門というべきものを有しなければならぬ。一般的教養も専門によって生きてくるのであって、専門のない一般的教養はディレットタンリズムにほかならない。一般的教養と専門とは ③ ハイセキし合うものでなく、むしろ相 ④ オギナわねばならぬものである。ひとは固よりつねに一定の目的をもって読書するものではない。何か目的がなければ読書しないというのは読書における功利主義であって、かような功利主義は読書にとって有害である。目的のない読書、 B 読書のための読書というものも大切である。これによってひとは一般的教

(六枚のうち二)

受験番号		氏名	
------	--	----	--

(答えは、すべて解答题紙に記入すること。)

養に達することができる。一般的教養を得るといふ目的で一定の計画に従って読書することは勿論善いことではあるが、しかしかような計画は実行されないのが普通であつて、むしろ若い時代から手当り次第に読んだものの結果が一般的教養になるという場合が多い。一般的教養は目的のない読書の結果である。けれども当てなしに読んだものが身に附いて真の教養となるというには他方専門的な読書が必要である。専門のない読書は中心のない読書であつて、如何に多く読んでも何も読まなかつたに等しいことになる。

(三木 清 「読書と人生」による。)

(注) デイリツタンテイズム Ⅱ 学問や芸術を趣味として愛好すること。

問一 傍線部①～④に相当する漢字を含むものを、次の各群のア～エの中から、それぞれ一つずつ選び、その記号を書きなさい。

- |   |  |
|---|--|
| ① ドクソウ<br>ア 天地をソウセイする。<br>イ ピアノをエンソウする。<br>ウ ソウダイな計画を立てる。<br>エ 得点をソウケイする。 | ② テキした<br>ア 不備な点をシテキする。<br>イ ケイテキを鳴らす。<br>ウ 実力はプロにヒツテキする。<br>エ テキギ昼食をとる。     |
| ③ ハイセキ<br>ア 茶碗をハイケンする。<br>イ ハイクを作る。<br>ウ 可能性をハイジヨする。<br>エ 力士をハイギョウする。     | ④ オギナわねば<br>ア 損害をホシヨウする。<br>イ ホニユウ類に分類される。<br>ウ テンポを構えて販売する。<br>エ 権利をホシヨウする。 |

問二 傍線部 a～d の漢字について、その読みをそれぞれ書きなさい。

問三 A・B にあてはまる最も適切な語を、次のア～カの中からそれぞれ選び、その記号を書きなさい。

- ア あたかも イ たとえ ウ むしろ エ さぞ オ いわば カ よもや

問四 1 仕組んでいるのであるの 主部を本文中から抜き出して書きなさい。

問五 2 同様の関係とありますが、筆者はどのような点が同様の関係にあると述べていますか。何と何がどのような点において同様の関係にあるかを明らかにして、書きなさい。

問六 3 ただ一冊の本の人間とありますが、それはどのような人間であると筆者は述べていますか。五十字以内で書きなさい。

問七 ア多読、イ濫読、ウ博読とありますが、筆者はそれぞれどのような読書の仕方であると述べていますか。書きなさい。

問八 これまでの学習指導によって、読書習慣を身に付けた生徒に対して、読書の質を高めさせるために、あなたなら、国語科の授業においてどのように読書指導を行いますか。次に示す条件1～3に従って、書きなさい。

条件1 二段落構成とし、第一段落には、あなたが国語科の授業において行う読書指導を具体的に書き、第二段落には、その指導によって、生徒の読書の質を高めさせることができるかと考える理由を書くこと。

条件2 指導を行う前の、読書習慣に関する生徒の状況を具体的に示すこと。

条件3 読書と一般的教養に対する筆者(三木清)の考え方を踏まえて書くこと。

(六枚のうち三)

受験番号

氏名

(答えは、すべて解答题用紙に記入すること。)

□ 次の文章A～Cを読んで、あとの問一～十三に答えなさい。

A

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見る<sup>a</sup>もの、聞くものにつけて、言ひ出だせ<sup>b</sup>るなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかもやはらげ、猛き武士の心をも慰む<sup>c</sup>るは、歌なり。

この歌、天地の開け始まりける時より出で来にけり。しかあれども、世に伝は<sup>d</sup>ることは、ひさかたの天にしては下照姫に始まり、あらかねの地にしては素戔鳴尊よりぞ起こりける。ちはやぶる神世には、歌の文字も定まらず、素直にして、言の心分きがたかりけらし。人の世となりて、素戔鳴尊よりぞ、三十文字あまり一文字はよみける。かくてぞ花をめ、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露を悲しむ心・言葉多く、さまざまになりける。遠き所も、出で立つ足下より始まりて年月を渡り、高き山も、麓の塵泥よりなりて天雲たなびくまで生ひ上れるごとくに、この歌もかくのごとくなるべし。

(古今和歌集)による。

(注) 下照姫 Ⅱ 古代の神話に登場する神の名。

素戔鳴尊 Ⅱ 古代の神話に登場する神の名。

B (設問の関係で返り点・送り仮名を一部省略している。)

夫<sup>レ</sup>和歌者、託<sup>ニ</sup>其ノ根<sup>ヲ</sup>於心地<sup>ニ</sup>、発<sup>ニ</sup>其ノ花<sup>ヲ</sup>於詞林<sup>ニ</sup>者也。人之在<sup>ル</sup>世<sup>ニ</sup>、不能<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>為<sup>ナル</sup>コト。思慮<sup>ヲ</sup>易<sup>ク</sup>遷<sup>リ</sup>、哀樂相<sup>レ</sup>變<sup>ズ</sup>。感<sup>ハ</sup>生<sup>リ</sup>於志<sup>ニ</sup>、詠<sup>ハ</sup>形<sup>ニ</sup>於言<sup>ニ</sup>。是以<sup>レ</sup>、逸<sup>スル</sup>者ハ其ノ声<sup>ヲ</sup>樂<sup>シク</sup>、怨<sup>ズル</sup>者ハ其ノ吟<sup>ヲ</sup>悲<sup>シク</sup>。可<sup>ク</sup>以<sup>チ</sup>述<sup>レ</sup>懐<sup>ヒ</sup>ヲ、可<sup>ク</sup>以<sup>チ</sup>發<sup>ス</sup>憤<sup>リ</sup>ヲ。動<sup>カシ</sup>天地<sup>ヲ</sup>、感<sup>ゼシメ</sup>鬼神<sup>ヲ</sup>、化<sup>シ</sup>人倫<sup>ヲ</sup>、和<sup>スル</sup>コト夫婦<sup>ヲ</sup>、莫<sup>ク</sup>宜<sup>ニ</sup>於和歌<sup>ニ</sup>。

若<sup>シ</sup>夫<sup>レ</sup>春ノ鶯<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>轉<sup>ニ</sup>花ノ中<sup>ニ</sup>、秋ノ蟬<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>吟<sup>ニ</sup>ハ樹ノ上<sup>ニ</sup>、雖<sup>モ</sup>無<sup>ニ</sup>シト曲折<sup>一</sup>、各<sup>ニ</sup>發<sup>ス</sup>歌謡<sup>ヲ</sup>。物皆有<sup>ル</sup>ハ之<sup>レ</sup>、自然之理也。然<sup>レ</sup>ドモ而<sup>シテ</sup>、神ノ世七代、時<sup>ニ</sup>質<sup>ニ</sup>人淳<sup>ク</sup>シテ、情欲無<sup>ク</sup>分<sup>カル</sup>コト、和歌未<sup>ダ</sup>作<sup>ラ</sup>。逮<sup>ヒテ</sup>于素戔鳴尊<sup>ノ</sup>到<sup>ル</sup>ニ出<sup>ル</sup>雲ノ国<sup>ニ</sup>、始<sup>メテ</sup>有<sup>リ</sup>三十一字之詠<sup>一</sup>。今ノ反歌之作り也。其ノ後<sup>ニ</sup>、雖<sup>モ</sup>天<sup>ノ</sup>神之孫<sup>ニ</sup>、海童<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>女<sup>ト</sup>、莫<sup>ク</sup>不<sup>ト</sup>以<sup>チ</sup>和歌<sup>ヲ</sup>通<sup>ヒ</sup>情<sup>ヲ</sup>者<sup>甲</sup>。爰<sup>ニ</sup>及<sup>ビ</sup>人ノ代<sup>ニ</sup>、此ノ風大<sup>キ</sup>ニ興<sup>ル</sup>。長歌、短歌、旋頭、混本之類、雜<sup>レ</sup>体非<sup>ズ</sup>一<sup>ツ</sup>ニ。源流漸<sup>ク</sup>ニ繁<sup>シ</sup>。譬<sup>ハ</sup>猶<sup>下</sup>シ弘<sup>レ</sup>フ雲<sup>ヲ</sup>之<sup>レ</sup>樹<sup>ノ</sup>、生<sup>レ</sup>リ自<sup>ニ</sup>寸苗<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>煙<sup>一</sup>、浮<sup>レ</sup>ブル天<sup>ヲ</sup>之<sup>レ</sup>波<sup>ノ</sup>、起<sup>中</sup>於<sup>一</sup>滴<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>露<sup>上</sup>ヨリ。

(古今和歌集)による。

(注) 曲折 Ⅱ 複雑な事情。

天神 Ⅱ 天の神。

海童 Ⅱ 海の神。

(六枚のうち四)

受験番号

氏名

(答えは、すべて解答题用紙に記入すること。)

C 鳥羽法皇の女房に、小大進といふ歌よみありけるが、待賢門院の御方に、御衣一重失せたりけるを負ひて、北野にこもりて祭文書きてまもられるに、三日といふに、神水をうちこぼしたりければ、檢非違使、「3これに過ぎたる失やあるべき。出で給へ。」と申しけるを、小大進泣く泣く申すやう、「公の中の私と申すはこれなり。今三日のいとまをたべ。それにしるしなくは、我を具して出で給へ。」と、うち泣きて申しければ、檢非違使もあはれにおぼえて、延べたりけるほどに、小大進、

思ひ出づや無き名たつ身は憂かり  X と現人神になり  Y 昔を

とよみて、紅の薄様一重に書きて、御宝殿に押したりける夜、法皇の御夢に、よに気高くやんことなき翁の、束帯にて御枕に立ち、「やや。」とおどろかしまるらせて、「我は北野右近の馬場の神にて侍り。めでたき事の侍る、御使ひ賜はりて見せ候はん。」と申し給ふとおぼしめして、4うちおどろかせ給ひて、「天神の見えさせ給へる、いかなる事あるぞ。見て参れ。」とて、「御廐の御馬に、北面のものを乗せて馳せよ。」と仰せられければ、馳せ参り見るに、小大進は雨しづくと泣きて候ひけり。御前に紅の薄様に書きたる歌を見て、これを 1取りて参るほどに、いまだ参りも着かぬに、鳥羽殿の南殿の前に、かの失せたる御衣をかづきて、先をば法師、あとをば敷島とて待賢門院の雑仕なりける者かづきて、獅子を舞ひて参りたりけるこそ、天神のあらたに歌にめでさせ給ひけると、めでたく尊く侍れ。すなはち小大進をば召しけれども、かかる問拷を負ふも、心わるきものにおぼしめすやうのあればこそとて、やがて仁和寺なる所に、5こもり居てけり。

5「力をも入れずして」と「古今集」の序に書かれたるは、これらの類にや侍らん。(古今著聞集)による。

(注) 負ふ || 嫌疑を受ける。 北野 || 北野天満宮。 まもられけり || 見張られていた。

公の中の私 || 「公のことでも時には私情で手加減する」という意。

現人神 || 菅原道真を指す。右大臣であったが、讒言により左遷された。死後、怨霊になったとして畏られ、北野天満宮に天神として祀られた。「北野右近の馬場の神」も同じ。

問一 文章Aは、「古今和歌集」の「仮名序」と呼ばれる部分です。この部分の筆者は誰ですか。その人物名を漢字で書きなさい。  
問二 a|、b|、c|、d|のうち、助動詞であるものを選び、その記号を書きなさい。また、その助動詞を文法的に説明しなさい。

問三 文章Aの中から、枕詞を三つ抜き出して書きなさい。

問四 e|、f|、g|、h|の本文中における読み方を、送り仮名も含めてそれぞれ現代仮名遣いで書きなさい。

問五 f|と同じ意味の「易」を含む熟語として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア 貿易 イ 易者 ウ 辟易 エ 容易

問六 1 莫<sup>レ</sup>、宜<sup>ニ</sup>於<sup>一</sup>和歌<sup>一</sup>の書き下し文を書きなさい。

問七 2 物 皆 有<sup>レ</sup>ハ、之<sup>レ</sup>、自然<sup>一</sup>之理<sup>一</sup>也と同じ内容を述べているといえる部分を、文章Aの中から二十五字以内で抜き出して書きなさい。

問八 和歌の起源について、文章AとBに述べられている内容の共通点と相違点を、それぞれ書きなさい。

問九 3これに過ぎたる失やあるべきの口語訳を、「これ」の内容を明らかにして書きなさい。

問十  X・ Y にあてはまる過去の助動詞「き」について、それぞれ適切な活用形にして書きなさい。

問十一 4うちおどろかせ給ひてに用いられている敬語をすべて取り上げ、その文法的な説明と敬意の対象を書きなさい。

問十二 h取りて参る、こもり居ての主語を、次のア～オの中からそれぞれ選び、その記号を書きなさい。

ア 鳥羽法皇 イ 小大進 ウ 天神 エ 北面のもの オ 雑仕なりける者

問十三 5「力をも入れずして」と「古今集」の序に書かれたるは、これらの類にや侍らんとありますが、文章Cの筆者は、文章

Cを例に挙げて、どのようなことを述べようとしていますか。文章Cの内容に触れて、百二十字以内で書きなさい。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

(答えは、すべて解答用紙に記入すること。)

【三】 次の問一・二に答えなさい。

問一 平成三十年三月告示の高等学校学習指導要領 国語 では「知識及び技能」の内容に「情報の扱い方に関する事項」が設定されています。情報の扱い方に関する「知識及び技能」が国語科において育成すべき資質・能力とされているのはなぜですか。「整理」、「関係」、「理解」、「表現」という語を用いて書きなさい。

問二 平成二十一年三月告示の高等学校学習指導要領 国語 国語総合 2 内容 C 読むこと (1) ウ には、「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」と示されています。この指導事項を踏まえて、『羅生門』(芥川龍之介)を教材として脚本を作成するという言語活動を設定し、授業を行うこととします。次の【評価規準】は、この授業を行う際に設定した「読むこと」に関するもので、【教材】は授業で脚本を作成させる際に使用したものです。あとの(1)・(2)に答えなさい。

【評価規準】

読むこと	表現に即して、読み取った下人と老婆の状況や心情などについて、分析したり解釈したりした上で、表情や動作として、ト書きに書き表している。
------	--

【教材】

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」  
下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑といっしよに、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「なるほどな、死人の髪の毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、みな、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死なななら、今でも売りに往んでいたことである。それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいと言うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていたそうなの。わしは、この女のしたことが悪いとは思っていぬ。せねば、飢え死にをするのじゃ、しかたがなくしたことである。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするじゃ、しかたがなくすることじゃわいの。じゃ、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるのである。」

老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。

下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、飢え死にするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。そのときの、この男の心持ちから言えば、飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が終わると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつこうようにこう言った。

「では、俺が引剥ぎをしようと思ひまいな。俺もそうしなければ、飢え死にする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎ取った。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしこの口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎ取った檜皮色の着物を脇に抱えて、またたく間に急なはしごを夜の底へ駆け下りた。

受験番号	
氏名	

(答えは、すべて解答用紙に記入すること。)

(1) この授業において、【教材】中の□で囲まれた部分のせりふに対して、「おおむね満足できる」状況(B評価)と判断できるト書きを、具体的に想定して書きなさい。また、そのト書きが「おおむね満足できる」状況(B評価)であると判断される理由を、ト書きから根拠を挙げて書きなさい。

(2) この授業において、ワークシートを用い、登場人物のせりふに対して、生徒にト書きを書き入れさせたところ、次の【ワークシート】のようにト書きを記入した生徒がいました。この生徒を「おおむね満足できる状況」(B評価)に到達させるために、あなたならどのような手立てを講じますか。その手立てを、「【ワークシート】に記入したト書きに当たる【教材】中の部分に傍線を引かせ、意識させる。そして、「」に続くように具体的に書きなさい。

## 【ワークシート】

せりふ	ト書き
<p>老婆 「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」</p> <p>老婆 「なるほどな、死人の髪を毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、みな、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいたことである。それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいと言うて、太刀帯どもが、欠かさず薬料に買っていたそうよ。わしは、この女のしたことが悪いとは思うていぬ。せねば、飢え死にをするのじゃや、しかたがなくなることである。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするじやや、しかたがなくすることじゃわいの。じゃや、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであろ。」</p> <p>下人 「きつと、そうか。」</p> <p>下人 「では、俺が引剥ぎをしようと思ひまいな。俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」</p>	<p>下人 老婆の話聞いて失望する。同時に憎悪と冷ややかな侮蔑が心の中に入ってくる。</p> <p>老婆 片手に死骸の頭から奪った長い抜け毛を持って、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら言う。</p> <p>下人 太刀を鞘に収めて、太刀の柄を左の手で押さえ、右の手で、赤く頬にうみを持った大きなきびを気にしながら、冷然と聞く。聞いているうちに、心にある勇氣が生まれてくる。</p> <p>下人 嘲るように念を押す。</p> <p>下人 不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくように言う。</p>



高等学校 国語科 解答用紙

(四枚のうち二)

受験番号	
氏名	

問題番号												問題番号			
問十二	問十一		問十	問九	問八		問七	問六	問五	問四	問三		問二		問一
h		敬語	X		相違点	共通点					e		説明	記号	
		文法的な説明													
i		敬意の対象	Y												

解答欄





3

高等学校 国語科 解答用紙

(四枚のうち四)

受験番号		氏名	
------	--	----	--

問題番号		解答欄	
問一		問二	
(1)		(2)	
		「ワークシート」に記入したト書きに当たる【教材】中の部分に傍線を引かせ、意識させる。そして、	
		「おおむね満足できる」状況（B評価）であると判断される理由	